
想の本～ソウノホン～

ノイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想の本々ソウノホン

【Nコード】

N11630

【作者名】

ノイ

【あらすじ】

手が動かなくなりました。足が動かなくなりました。皮膚が皮膚じゃなくなりました。髪が枝のように広がりました。私が私じゃなくなりました。

けど、私は貴方を待ち続けます。必ず帰って来ると行つた貴方を待ち続けます。

貴方が死んだと人は噂します。でも私には待つ事しか出来ません。貴方が死んだ後を追うことも、貴方の死を確かめる事も出来ません。だから私は待ち続けます。貴方が私に行つた言葉を信じて、帰って

来ると信じてここで立ち待ち続けます。

『泣かないで、私は幸せでした』

【想の本々ソウノホン々】

「病」

私の叫び（前書き）

悲しい内容になってます。苦手な方は戻って下さい。

私の叫び

知らない部屋、知らない男達。強引に連れ込まれ、行き着いたのは地獄。何度も何度も犯され汚され、為す術もなくただ泣くだけ。

『やめて、お願い』

何度も何度もそう言った。

『ごめんなさい、ごめんなさい』

悪くもないのに何度も謝った。

懇願しても泣いても謝っても止まらない暴力暴行。血が止まらない、腫れが収まらない。最初の体より数倍も膨れ上がった私の体。お腹が空くも与えられるのは餌とも言えない最悪なもの。

この地獄の中でも私は希望を捨てずに我慢した。死ぬ方がマシだとされても私は生きる道を選んだ。けどその選択は男達を喜ばせるだけで。

ある日地獄に新しい暴力が増えた。裸にされ外に置き去り。体の部分を火炙り。

それでも私は生きたい。この地獄から抜け出したい。体はやがて動かなくなり最終的に強まる暴力暴行。とうとう耐えられなくなった私の心。静かにゆっくりと時を止める。

『これは夢だったの』

『そう、酷い酷い夢だったの』

『少し眠るだけ』

『あれだけ痛かったのにもう痛くない』

『何だか安心する』

『お母さんの温かいスープが食べたいな』

『あ、ご飯が出来たみたい』

目を、心をゆっくり閉じて、夢から覚めるのを静かに待つ。次に目を開けた時には私の部屋。お母さんが早く起きなさいと朝ご飯を用意しながら叱るだろう。

ほら、何だか暖かい。

ほら、お母さんの呼ぶ声が聞こえる。

『良い匂いがするね。今日はなに?』

『美味しそうなスープだね』

『いただきます』

私の叫び（後書き）

本当にあった事件を思い書きました。不快に思った方もいるかも知れませんが、読んでくれてありがとうございます。
こんな事件が二度と起こらないよう願っています。

ニンゲンさん

ネコさんは食べるものが無くて困りました。だから偶然会った同じネコさんを食べました。次の日他のネコさんに食べられました。

イヌさんは散歩中に嫌いなイヌさんと会いました。だからそのイヌさんを傷つけました。次の日そのイヌさんに仕返しをされました。トラさんには怪我をしたお母さんがいました。もう動けないそうなのでトラさんはお母さんを殺しました。次の日トラさんは一人ぼっちでした。

ライオンさんは自分の子どもとケンカをしました。そしてついつい殺してしまいました。次の日ライオンさんはご飯を探しに行く必要がありませんでした。

ニンゲンさんは食べるものが無くて困ってました。だから偶然会ったニンゲンを食べました。次の日もその次の日も。

ニンゲンさんはある日友達から悪口を言われました。物凄く腹がたったのでその友達を傷つけました。次の日友達が離れて行きました。

ニンゲンさんはある事に疑問を抱きました。その疑問を確かめる為にニンゲンさんは自分の力づくを殺しました。ニンゲンさんは捕まりました。今までのことも含めてたっぷり怒られました。でも二

ンゲンさんの質問には誰も答えてくれません。ただダメだと言っばかりでした。

ニンゲンさんは死ぬことになりました。今までの行いを死んで詫びることになりました。でもニンゲンさんはちつとも悪いことした覚えはありませんでした。

ニンゲンさんの首に縄がかけられました。ニンゲンさんは不思議そう顔をしていました。

ニンゲンさんは気付きました。死ぬのは痛くて苦しいことだと気付きました。ヒトがヒトを殺してはダメなのは自分が死にたくないからだと気付きました。

ニンゲンさんは笑いました。ずっと気になっていた答えがわかり嬉しそうに笑いました。そのニンゲンさんを見て皆気持ち悪がりましました。

ニンゲンさんは思いました。自分一人が気持ち悪いんじゃない。皆気持ち悪いんだ。ニンゲンさんは最後にヒトを殺して良かったと思いながら死にました。

何年かたって、ニンゲンさんと同じことをするヒトが現われました。そのヒトはニンゲンさんと同じように笑いながら死んでいきました。

ヒトは他の命を奪つくせに自分の命を奪う者を悪とする。

ニンゲンさん達はこれからヒトを沢山殺します。ニンゲンさん達は一番ヒトが嫌いでした。

ニンゲンさん（後書き）

何で人は人を殺したらダメなのか。

何で人は人を殺すのか。

何で人は裁きという行為でなら人を殺してもいいのか。

まあ、そんなどうでもいいこと関係ないか。

歩いている

楽しかったことと、辛かったこと。どちらが多いか僕にはわからない。けど確かにキミといたあの時間は楽しかった。キミといて辛かった時も今では楽しい思い出。キミといた時間は全てが輝いていて、ほら目を瞑ると昨日のように思えるよ。

またキミの笑顔が見れるんだって、またキミと一緒にいられるんだって、期待して夜を過ごす。けどそんな悲しい期待は静かな夜が奪いさつて、眩しい朝日が僕に現実を押し付ける。何度も何度もそんな日が続いた。

今僕は前を向けてるかな。今僕は前に歩いていけるかな。キミの面影を探してうずくまるのはもうしないよ。カレンダーが教えてくれるんだ。もう半年も経った。半年、僕は何度も泣いたし何度も悔やんだ。けどようやく思い出したんだ。キミとの約束を。

もうすぐでキミの誕生日がくる。給料の三ヶ月分。決めてたんだ。誕生日にプレゼントするって。今でもキミは僕が一番だよ。これから先もずっと。

今僕は前を向けてますか。背筋伸ばして歩いていますか。キミとの思い出を胸に今日も頑張ってみます。

ねえ、僕は歩けてますか。キミの自慢な彼氏でいられますか。

ねえ、キミは今何をしていますか。天国はどんな所ですか。

ねえ、いつか僕も約束を果たしたら行くから。その日までどうか僕を見ていて。優しく幸せそうに笑っていて。

『ねえ、今日も僕は歩いているよ』

守るモノ（前書き）

守らないとダメなことです……
ちよっただけ茶目っ気。

守るモノ

誰が考えたかわからねえ、クダらない規則やルール、決まり事。守ってる奴は良い奴賢い奴で、破った奴は悪い奴バカな奴。

ふざけるな。誰が考えたかわからねえモンで俺達を縛り付けるな。そんな気持ちわりいモン守ってる奴の方がイカレてやがる。

俺達は俺達の決まり事を守ればいいんだよ。それを守ってるうちは男だ。それを守れなくなったらクソヤロウだ。

いくら規則ルール決まり事を守ってもこれを守れてない奴はクソだ。

いいか。一度した約束は絶対守る。弱い奴は助ける。仲間を絶対に裏切らない。人に迷惑をかけない。睡眠はしっかりとる。ご飯は一日三回。早寝早起き。一日三善。わかったか。

守るモノ（後書き）

すいません。ふざけました。
でも実際に守れるものは守ってね。

因みに一日出来る限りの惰眠をむさぼるのが我が規則です！

ヲトシモノ

見つからない。ボクの落とし物。あの日どこかに落とした大事なものの。

晴れた日を暖かくて大好きだという君。

雨の日を歌のようで大好きだという君。

君が大好きと笑うだけで嬉しくなる。あなたは好き、と聞かれるだけでドキドキする。

君の動きに声にドキドキして、心臓が跳ねて、生きてると実感する。こんなボクでも心があるんだと嬉しくなる。

君が笑ってくれるから上を見て歩いていける。

君が手を握ってくれるから空を見ながら歩いていける。

いつか君に返そうと。この想いを返そうと考えた。どんな形にして返そうか。どんな贈り物をしようか。

何を贈っても君は嬉しそうに笑うから、逆にボクはそれが困る。

一番嬉しいものは何だろう。貰って一番喜んでくれるものは何だろう。

君の大好きな晴れの日に気づいたんだ。一番嬉しいのは隣にいてくれることだってことを。いつまでも、何年たってもずっと一緒にいてくれることだってことを。

落としモノ。ボクが落とした大切なモノ。手のひらから零れた掛け替えのない幸せ。

おかしいな。いくら下を探しても見つからない。いくら同じ道を戻っても見つからない。

落としモノが見つからない。大切なモノだったのに、落としたのに涙が出ない。

おかしいな。君といた時はちゃんと心があったのに。

落としモノが見つからない。長い時間探してやっと気づいた。下には落ちていないんだ。もう絶対に会えないんだ。

オトシモノ。やっと見つけたよ。それは手の届かない所にあった。高く高く、果てしなく高い場所。いくら手を伸ばしても届かない場所にあったんだ。

おかしいな。涙が出てきたよ。

おかしいな。もう君はいない筈なのに。

ボクの落とした大切なモノ。君という掛け替えのない幸せ。下には落ちてなかった。どこにも落ちてなかった。君は高く高く空へのぼったんだね。手のひらから零れ落ち、ふわりと高く空へ。

ボクが守れなかった大切な存在。君というオトシモノ。

ヲトシモノ（後書き）

……意味不明。この一言がまず出てきたと思います。大丈夫です。僕もわかりません。感傷的に、感情的に、とにかくそれを意識しました。

因みにもう一つの小説の“落としモノ”とあわせてます。わかる人もたぶん……いる、かな……。

てことで、世の中はいつになったら平和になるのかなあ？

とか、考えながら寝ます。更新したのが深夜なんですよ。……どうでもいいですね。

長々とすみません。寝ます。おやすみなさい。

オオカミ少年

昔々ある村に力の強い男の子がいました。男の子は頭も大変良かったのです。ただし素直じゃなく、自分の気持ちを正直に他の人に伝えられないのでした。だから他の人は男の子の事をひねくれ者と思ってました。

ある日近くの村がオオカミの群れに襲われました。村の人は自分達の村にも来るんじゃないかと毎晩遅くまで怯えてました。

「オオカミが出たぞ！」

その声で朝早く起こされました。外に出て見るとひねくれ者の男の子が叫んでました。怖がりながらも村人達は簡単な武器を取り村を見回ります。けど何処にもオオカミはいません。足跡すら村にはありませんでした。

子供の悪戯。そう思い最初は咎めませんでした。けれど、次の日も、その次の日も毎朝男の子の声は続きました。毎晩遅く寝て毎朝早く起こされる。ただでさえあまり寝れていない村人は我慢の限界でした。

「オオカミが出たぞ！」

今日も男の子は叫びました。我慢の限界を超えていた村人達は外に出てその男の子の胸ぐらをつかみ怒鳴りました。

「うるさいぞ！ もうお前の言うことは信じない！」

男の子は悲しそうな表情を見せ、口を動かしました。怒っている大人に怯えて声にはならず、けど何かを伝えようと必死で口を動かします。大人はそれを馬鹿にしていると勘違いして男の子の頬を殴りました。

「いいなもう嘘をつくな！」

それだけ言うとは皆家に帰って行きました。

次の日男の子の声は無くなりました。次の日もその次の日も。ただおかしなことに日がたつに連れ男の子の体は傷だらけになってました。

ずいぶん前から男の子は毎晩遅く村をでて毎朝早くオオカミが出たぞつと大声をあげて帰ってきていました。ちょうど隣の村がオオカミに襲われた後日ぐらいからです。

一人の村人が毎朝傷をつけて帰ってくる男の子をみて不思議がりました。そして今夜男の子の後をつけることにしました。

夜遅く、男の子は人知れず家を出て村はずれへと続く道を駆けました。村人はバレないようにこっそりつけました。

ある程度進んだ所で村人は嫌な予感がしました。村はずれを真っ直ぐ進むと隣の村があります。まさしくずいぶん前にオオカミに襲われた村でした。

おかしいとは思っていました。自分も含め他の村の皆おかしいと思っていました。隣の村が襲われてからもうずいぶんたちます。なのに自分の村ではオオカミの被害は一つもありません。目撃情報だって、ひねくれ者の男の子の言葉だけでした。それも嘘の目撃情報です。

ピタリと男の子の動きが止まりました。手にはいつの間にか持っていた太い木の棒があります。

「ワォーン！」

耳をつんざくような不吉な音が響きました。
そして村人は思いました。

『オオカミが出たぞ！』

そう叫んでいた男の子の言葉が嘘ではなかったら。

オオカミが出たぞと言う言葉は村の近くに出たから何か対策を練ろうという言葉だとしたら。

あの時何かを伝えようと必死で動かしていた口はそのことを伝えようとしていたのなら。

毎朝増えていた傷はオオカミ達による傷だったとしたら。

ああ、自分達は何て酷いことをしたのだろう。

十数匹のオオカミに睨まれた男の子がじっとオオカミを睨んでます。

この子は自分達の為にオオカミと戦っていたんだ。毎朝傷が増えていたのはオオカミの数が増え続けていたから。こんな大勢のオオカミに囲まれたら幾ら力が強くて頭の良い男の子でも駄目でしょう。

村人は後悔しました。この場に何も持ってこなかった自分に。一人で来てしまった自分に。この子の言うことを信じてあげられなかった自分に。

この日まだ日が登りきらない朝早く村はオオカミの群れに襲われました。

オオカミ少年（後書き）

昔話のような感じに……頑張りました。

嘘つき者としてられているオオカミ少年。実は無口で人と喋るのが苦手な少年だった。なんてことがあるわけもなく、いつも通りこんな話だったら良いなあと自分の妄想で書きました。

まあ疑うよりは信じていたい。なんてよく聞く台詞がありますけど、それは時と場合と人を選んで下さいと言いたいです。

オオカミ少年、ああ、こんな話だったら良いなあと共感して頂けたら幸いです。では、また！

温もり

今日の空は少し曇り空です。

もうじき雨が降ってきそうです。

貴方は今、笑えて過ごせていますか？

私はまだ上手く笑えません。

笑うにはもう少し時間がかかりそうです。

笑っていた。泣いていた。あの時間を思い出します。

意地を張って喧嘩したあの時を思い出します。

貴方が残した僅かな温もりがただ残酷で。

私はやっぱり笑うにはまだ時間がかかります。

……あ、雨が降ってきました。

だんだんと強くなっています。

雨の日は冷えますね。

貴方は今、凍えてませんか？

私は寒くて死んでしまいそうです。

写真もビデオも思い出も、そんな僅かな温もりじゃ暖まらないです。

手を繋いで。腕を組んで。一緒に歩いたあの道をもう一度一緒に歩きたいです。

キスをして、抱き合った、あの温もりをもう一度私に感じさせてく

ださい。

貴方がくれた温もりが過去となって私を苦しめます。
貴方が傍にいない現実が私を虐めます。

一緒にいるって言うてくれたのに。
私を置いて先にいった嘘つきな貴方を怒りたいです。
馬鹿と罵って、貴方を叩きたいです。

嘘です。

嘘だから、

そんなことしないから。

良い子でいるから、

だから、お願い。

お願いだから、

もう一度、私を抱き締めてください。

貴方の温もりを感じさせてください。

温もり（後書き）

大好きな恋人に先に逝かれた彼女の心情です。

個人的に、本当に個人的にだけど、丁寧語で喋る人がたまに丁寧語を崩す感じが好きです。

あれです。あれなんですよ。ツンツンしてる子がたまにデレるのが良いつてのと同じです。

クールな子が焦ってる感じが好きなのと同じです。

いわゆるギャップですね。

何か長々と気持ち悪いことを語りましたが、軽く自己嫌悪に浸りながらこのへんで失礼しますね。

料理（前書き）

ちょっとグロいかなあ。

料理

こんな現実見たくないから僕は自ら両目を潰す。
スプーンで抉り、掬い出す。

貴女の泣き声なんか聞きたくないから僕は両耳を千切る。
フォークで引つ掻き回し、根本から引きちぎる。

貴女からの不快な臭い何て嗅ぎたくないから僕は鼻を削ぎ落とす。
ナイフで刺し込み、力を入れグリグリと。

貴女の名前を呼んでしまいそうな口を縫い付ける。
数本の箸を上唇から下唇に、舌を貫通させ、塞ぐ。

貴女の冷たい感触なんか感じたくないから僕は自ら火をつける。
足に広がり、燃え盛り、冷たいだなんてもう思わない。

でも、貴女がもういないと勝手に脳が思い込むから、僕は自分の頭
を何度も叩く。

コップで叩き、お皿で殴り、痛みなど感じなくなるまでに。

そして、貴女の大好きな料理を作る。初めて作るメニューだけれど
め、貴女が美味しく食べてくれるように。

さあ、食べてよ。右手のナイフで好きなだけ斬り削り、左手のフォ
ークで刺し取り、貴女の小さな口で噛み砕いてよ。

眼はコリコリするよ。耳は少し柔らかい。鼻はよくわからないや。

口は少し噛み難いかも知れないね。喉が渴いたなら美味しい飲み物があるよ。コップ一杯のとろとろの血。

もうお腹が一杯？

まだ、駄目だよ。一番美味しいデザートがまだ残ってる。

さあ、食べてよ。血で味付けされた、僕の脳みそだよ。

貴女の口には入らないから小さく切ろうね。小さく切ったら今度はスプーンで少し潰して見て。そしたら味が染みるから。フォー kuj ya 食べるにくだろうから箸で摘んで食べてね。ねえ、口溶けがいいでしょ。

料理（後書き）

昔みたチエンメがグロかったので少し対抗。

大好きな貴方の左目を右手のナイフで、ほにやらにやらの内容だったのを覚えてるなあ。

お嬢様が死んだのを認めたくない召使い。けど、死んだことをはつきりと脳は理解していて、それを拒んで心が壊れた……。みたいな感じです。

たまにはこんなグロいのも……どうですか？

お嫁さん

立派な父と母、そして優しい召使い。私は幸せでした。

そう、これは少し裕福な家庭の物語り。

立派な両親は私のことを大事にしてくれたけれど、やはり仕事は捨てられなかった。いつも置いてけぼりな私。そして小さい頃からずっと傍にいて世話をしてくれた貴方。

歳は一回りも違う。両親からも信頼されていた貴方。勉強も出来て運動も出来る。裁縫も出来て料理も出来る。何でも出来る私の召使い。

でも、怒ったら少し恐い。言ってることは正論だし、言い返すことが出来ずに私はいつも泣いていた。

そんな私に美味しい料理を持って来てくれる優しい貴方。

貴方の作る料理は大好き。美味しくて、ホッとして、幸せになれる。

いつか言っていた貴方の夢。料理人になること。叶ったら出て行っちゃうだね。

だったら、私の願いも聞いて。私の願いは、幸せになれる料理を作る料理人と結婚すること。きっと私を今以上に幸せにしてくれる。貴方に夢を伝えたら、貴方は照れくさそうに笑っていたね。貴方の笑顔に私は嬉しくなって、つられて笑う。

——ぐちゃ。

ねエ、ナニをしてるノ。

目ヲ閉じないデ。私を見テ。

耳を塞がナイで。私ノ声を聞いて。

私の香りハ嫌いナノ？

モウ、喋りたくないノ？

ネエ、料理を作ツてヨ。

フタリが、幸せにナレる料理。

私は、マダここにイルヨ。

ねえ、私を見つけて。

ミツケテヨ！

お嫁さん（後書き）

意味がわからない人手あげてえ。

ハイッ！（え…）

安心してください。自分にもわかりません。

前の料理の続きと言えば続き何ですが、説明不足、設定不足、文章下手、意味不明…、理解不能…、支離滅裂…。そこまで言われたらさすがに凹みます。けどすぐに復活！

そのテンションが先ず理解不能…。

ハイ、すいません。

まあ、結論から言わせて貰うと、お嬢様は死んでいます！

そして、召使いも自分を料理して死んでいます！

そしてそして、自分はDMじゃありません。責められても喜びませんから！

最後のは全く関係ないから頭の隅にでも追いやったあとで消して下さい。

お嬢様が死んだ理由は…、まあ一番ありきたりな強盗とかでいいんじゃない？

投げやりですが、ではまた！

ウンザリした世界

もうウンザリだ。

正義を掲げ罰を与える人間。
気付いているんだろ？

ソレは罰ではなく立派な罪だ。

善を気取り、他人に施す人間。
周りは皆気付いているんだ。

お前らのソレは自分に酔いしれているだけの自己満足だ。

ソイツらに流され、当たり障りのないように生きる人間。
そろそろ気付けよ。
お前らは人形なのか？

町民の為と言い、町民の望みを並べ、変わらないといけない。変えてみせる。そんなことを高らかに繰り返し、支持を得ようとする人間。

本当に叶うまでの道筋がお前らには見えてるのか。

国民の為と言い、集まって話し合っている人間。
今するべき事をわかっているのか。話し合うだけじゃ意味が無い。

他人を蹴落とす事しか考えず、助けを求めている手が見えてない。ずっと叫んでいる悲鳴が聞こえていない。

団結と言う言葉がお前らの辞書には無いのか。

忘れてはならない痛みと言いながら、新しい痛みに胸踊り。他人事だと思つて横から茶々を入れて楽しんでいる。

頑張つて。諦めないで。そんな曖昧な言葉でしか励まされない。それこそ他人事だと思つている証じゃないのか。

辛かったよね。悲しいよね。可哀想。そんな言葉を吐きかけるな。同情何てしなくていい。安全圏からの同情程上から目線なことなど無い。

忘れてはならない痛みはどうした。そんなもの何度も何度も聞いて来たぞ。一体忘れてはならない痛みは何億個あるんだ。覚えている者などこの世に存在するのか。

神様を信じ救いを求める人間。

お前はいつまでそうやって見えもしない者の救いを待つんだ。

神様の裁きだと恥ずかしがる事なく狂言を繰り返す人間。

お前の大事な人が死んだ時お前はそれで納得するんだな。

今までの行いに自然が怒つたんだと言う人間。

幼い子供に何の罪があった。生まれたばかりの赤ちゃんに何の罪があったんだ。

もうウンザリだ。

ウンザリした世界（後書き）

特に深い意味も浅い意味も何も無いです。

少しばかりの疑問と、納得のいかないことを、と思いまして。

地位も名誉も権力も力も賢も何も無い自分ですが、人形じゃないことは確かです。まあ、当たり前なんですけど。

自分以外のモノを思いやるってことが人間には一番難しいことなんだと思います。

良い台詞を言って終わらそうとしたんですけど、あまり良い台詞じゃないかな？

まあ月並みですもんね。

じゃ今回はこのへんで。では、また！

輪廻転生

全ての命は生まれ死ぬ。

一つの例外なく、生まれて、死んだらまた新しい命としてこの世に生まれる。

“ 輪廻転生 ”

巡り巡り繰り返す。

生まれおちて、死にゆくを。

何百年と幾年を迎えようと、次の命となる為に順番を待つ。

気がついたら私はここにいた。うつすらと光る無数の人魂で場は明るい。

蠢いて揺れて、列など無く、ただ思うがままにいる。各々が自分の順番を待っている。

もうどれだけここにいるだろう。私が一番長くここにいるだろう。必ず呼ばれる筈とわかっていてもこんなに長くいたらもしかしたらと思ってしまう。

外の世界はもう随分と違う。鎧をつけて戦わなくなった。旗を掲げ戦場を鼓舞しなくなった。何よりも馬に乗り大地を駆けなくなった。戦争は嫌いだった。けれど私には使命があったから。前線に立ち勝利を掴み国を救う使命が。

結局最後まで、女の子らしく生きることは叶わなかったから、今度こそは、と思っていたけれど。

やっぱり無理なのかも知れない。

私には体がない。骨もない。燃やされ全てを晒され流された。そんな私には新しい命など与えてくれないのかも知れない。

いいんだ。高望みはしない。贅沢はしない。我が儘は言わない。私はこれから永久にここで来るはずのない順番を待つ。大丈夫。最初から諦めていれば悲しくなんかない。

一人、また一人と順番がきて輪をくぐる。輪をくぐった者は消え失せ現世に生まれおちる。そして死にもう一度ここにくる。

ああ、本当は女の子らしいふわふわした服が着たい。

したことはない恋をしたい。

その恋人と感じたことのない幸せを感じたい。

生きていた頃が幸せじゃなかったとは言えない。そこには確かに仲間もいたし友達もいた。ちゃんと幸せもあった。けれど、女の子ではなかった。女の子としては生きられなかった。髪を切り、男装をし、怖い戦場に立ち、竦む足を無理矢理立たせ、剣と矢の嵐に身を投じた。

だから、ごめん。高望みはしないし、贅沢もしない。だから少しだけ我が儘を言わせて。叶わなかったっていい。想いを出させて。

私、生まれ変わりたい。今度は女の子としての幸せを掴みたい。

お願いします。

私を、呼んで。

輪廻転生。それは生と死を繰り返すを意味する。

全ての命は生まれおち死にゆき、生まれ変わる。

それは、動物でも、植物でも、昆虫でも、微生物と呼ばれる生き物
でさえも同じ。

一つの例外なく、廻り廻る、繰り返す。

そう、何一つの例外も無く。

今日もまた、新しい命が生まれおちる。

輪廻転生（後書き）

……ショックです。本当は前日の5月30日に投稿したかった。

理由は、ちゃんと珍しくあるんです。

実は僕は凄くジャンヌダルクが大好き何です！

かなり、もう本当にかなり！

僕と同じジャンヌダルクさんが好きな人、もしくは歴史に詳しい人は5月30日が何の日かわかりますよね！

だから前日は一人祈祷をば……。

あ、ジャンヌダルクはアーティストの方のじゃなくて聖女の方のです。

アーティストのJ a n n e D a A r c さんも大好きです。

ちょっとした雑学ですが、

ジャンヌの友とも言える人にジルドレ（面倒だから繋げてます）と言う男がいたんですが、この人はジャンヌの死後、魔術に手を染めジャンヌを蘇らそうと色々と残虐な事をしたんです。人体実験も勿論しました。

人を想う気持ちが深ければ深い程、その人を失った時、人は壊れてしまいます。悲しみであつたり、憎しみであつたり、怒りであつたり。

涙であつたり、声であつたり、罪であつたり。

想うことは同時にいつか壊れてしまう事なのかも知れません。

必ず別れがやって来るとわかっているのに何故人は繋がりを求めるんでしょうか。

別れる悲しみよりも、繋がる幸せの方が大切だからですか？

幸せが大きければ大きい程、大切だったらより大切な程、悲しみは比例して膨らむというのに。

わかっているそれでも繋がりを求めてしまう。

それは人が一人では生きられないという証なんです。

とまあ、ぐだぐだと変な事を長々とかきましたが、僕が一番言いたい事は、とにかく悔しいです。前日に投稿したかった……。

因みに今回の短編は、輪廻転生をジャンヌダルクさんを主役としてかきました。いつもと同じぐちゃぐちゃですが、女の子としての幸せを手に入れたというジャンヌさんの気持ちを理解して頂けたらなあ、と。まあ、自分の想像上のジャンヌですけどね。

あー、もう。めっちゃ長々とすみません。では、このへんで。また次回、あとかきで！

ゲーム

あるゲームの話をしよう。

そのゲームはとても簡単だ。まめにするのもいいし、長々と放っておいてもいい。ゲームの中の生き物達が勝手に進めてくれる。

することと言えば、新しい命を増やしたり、減らしたり、それと、イベントを行うことぐらいだ。

例えば、猿と言う生き物を作ったり、人という生き物に進化させたり。

例えば、涼しい時期や暑い時期を決めたり、雨を降らしたり、雪を降らしたり。

そうだ！ こんなのもありだ。同じ生き物同士で戦わせたりしてどっちが強いか見て楽しむだ。

このゲームの面白い所は他にもある。

自分が命を増やしたり減らしたりしなくても、ゲーム内で勝手に増えてたり減ったりする。

そして、凄い事にこのゲーム内の生き物達は各々意思が存在する。各々で文明を築いたりもするんだ。

なあ、凄いだろ？

けどな、不思議な事にこのゲーム内の生き物達はさ、うっすらと俺

達に気付いているんだ。

おかしいだろう。ゲームの中の奴らがプレイヤーに気付くんだけぞ。

そして何故か奴らは俺達の事を口を揃えてこう言っんだ。

——
神様。

なあ、お前もやって見るか？

ゲーム（後書き）

ちよつとありがたかな考えですね。

この世は実はゲームの世界で、自分達にはそれぞれプレイヤーがいる。

なんか小学生の頃そんなことをうつすらと考えていた時期が……。

もし、本当にこの世界がゲームだったら、そう思うとなんか嫌になりますね。

だって、プレイヤーの遊び心で僕達は死ぬってことになりますから……。
まあ、そんなこと有り得ないけど。

この世界は一人一人が主人公です。

上の台詞、よく聞くけど本音を言つとサポートキャラがいいなあ。

まあ、どうでもいいか。

ほんでは、ではまた！

希望

どんなになっても空は蒼くて。

今まで生きていた証を全部奪われた。物も思い出も。
涙が出て止まらなかった痛みは激しくて、今でもズキズキと胸を
挟む。

大好きな家族も一緒に奪いさって行く。さよならも、ありがとう
も言えないままの永遠の別れ。

どんなに私の心が泣こうと空は蒼いまま。

どんなに私が死にたいと嘆いても、空はいつもと変わらないあの
色。

大地が裂け、海が荒ぶろうと空は何一つ表情を変えない。

数え切れない沢山の大切な命がそこに還ろうとも、空は色を変え
ずただ受け入れる。

返してよ。ねえ、返してよ。

頭を地にこすりつけても、目が何倍に腫れようとも、沢山の人の涙が大地を濡らそうとも、この空は何も変わらない。

どんなに嘆き苦しみ、絶望しようと変わらないでいる。

憎かった。大地も海も空も。私から全てを奪った、沢山の人が大切なモノ全てを奪った自然が。

自ら命を捨てる人が出てくる。生きる意味さえも奪われた人達が。

私も捨てようかな。うつすらと決意して屋上まで歩く。

一步。あと一步踏み出せば、私もあの人の所へ行ける。

びゅうつと強い風が私を後ろへ戻した。

幻聴なのかも知れない。泣き疲れて、風の音と聞き間違えたのかも知れない。

それは、もういないあの人の声。短い、とても短い一言。

『生きる』

そう言われた気がした。

ふと、あの人を想い空を見ると、変わらぬ蒼をしていた。

ずっと、あの人を失った時からずっと同じ蒼。

やっと気付いた。あの蒼は、生きている私達だけが見れるんだ。私達に生きている事を実感させようとしてくれていたんだ。

澄み渡るような蒼は今日も綺麗で、その蒼の下では沢山の人が助けに来てくれている。

よく、生きてくれていたねと、知らない人なのに喜んでくれる。手をとり一緒に泣いてくれている。

その時に触れた肌がとても暖かくて、一緒に流してくれる涙が嬉しかった。

ごめんね。私はこれからも生きてみようと思う。この世界にもう大好きなあなたはいないけれど、私は生きて行こうと思います。

あなたの分も生きる。それを生きる意味にして、暫く生きて行くかと思っています。

あなたに会う頃にはおばあちゃんかも知れないけれど、変わらず私を好きでいてくれますか？

私の一番はずっとあなたです。この事実はずっと変わりません。だから、どうか見守っていて下さい。年をとっていく私をずっと見守っていて下さい。

強く、元気なあなたの好きな私でいるから。前を向いて歩いていくから。

ほら、見て。人って思っていたよりも優しくて強いんだよ。
自分も辛い筈なのに助けあっている。
自分には関係ない筈なのに涙を流し助けてくれている。

今日も空は綺麗な蒼空です。

そして私達はこの空を見て、今日も頑張っています。

希望（後書き）

いやあ、泣けますね。

実は連続投稿なんですよ。それはもう五分もかかってないんじゃないかなあっていうくらいの速さで。

あ、何で泣けるかって？

えーとですね。午前四時ちょっと過ぎの投稿なんですよ。そして、実は隠してるけど凄く眠いんですよ。

あくびが出て涙が出るんです。それで泣けるってことです。

まあ、そんなこと知ったこっちゃないですね。はい。

今回はあえて話については触れません。

触れなくても忘れてはいけない事何でああわかるかなあと。

文章ぐちゃぐちゃでわからないって人は、すみません。本気で謝るんで頑張ってください。

では、このへんで。また次回あとがきで。

大人になること

自分が悪くもないのに頭を下げ、
相手の顔色を伺って言葉を選ぶ。

本人の前じゃ言えないから、
人の悪口を影で話しあう。

思ってもいない事を口にし、
お互いで傷を舐めあう。

それが大きくなるって事なの？

それが大人になるって事なの？

周りは大人になれ口うるさく言うけど、
それが大人になるって事なら私は子供のままでいい。

悪くもないのに頭は下げる。

顔色伺って言葉を選ばない。

影で悪口なんて言わない。

思ってもいない事など言わない。

傷を舐めあうだけの関係何ていらない。

私は今の私のままでいる。

どれだけ不条理な事が私を襲おうとも、
それに屈する事はしない。
自分を棄ててまで生きたくはない。

大切なのは相手の顔色じゃない。

大事なものは頭を下げるんじゃない。

子供だからそんな事が言えるって大人はバカにするけど、

私は背が伸びようと、

体重が増えようと、

胸が大きくなろうと、

好きな人ができて、

その人との愛を覚えても、

絶対に私は私を棄てたりはしない。

大人になること（後書き）

現実はあるに甘くないんだぞつと言いたいですよね。

けど、誰だっけいつかは大人になるし、誰だっけ最初は子供だったんです。

今大人の人もこう言う時期があったと思います。こう言う時期があったからこそ、今大人として頑張っけいけるんだなと何も知らないくせに勝手に僕はそう思っけます。

まあ、まだまだ生意気な子供の言うことですので、あつそうと言う感じに流して下さい。

では次回、今回が子供だったので次回は大人で行こうかと思っけます。

そう言えは次回予告っけ大きく書かれたシャツを着ている人を見ただけれど、何を思っけそんなシャツを買っけたのか疑問に思っけ今日この頃

大人

小さい頃に何度も思った。

こついう大人にはなりたくない。

ああいう大人にはなりたくない。

けど、いつの間になっっている俺がいて。

なりたくなかったくせにそういう大人と同じことをしている俺がいる。

悔しくて何度も拳を握りしめた。

謝る意味がわからなくて何度もふざけるなど言いたかった。

けど、それが出来ないのが現実だ。

何も無かったあの頃なら出来たのかも知れない。

今は大切なモノが出来すぎた。

最愛な家族。大好きな人と結婚し、家庭を築いて、それが無くなるくらいなら俺のちゃんなプライドなんか幾らでも棄ててやろう。

守る為に奮うのは拳じゃなく、心。

耐える心が家族を救うのなら俺は幾らだって耐えられる。

なりたくなかった大人にだってなれる。

汗水流して働く。

理不尽だって耐え抜く。

それが、大好きな人の幸せに繋がるのなら俺は何だってできる。

いつか子供も成長して俺の事を馬鹿にする日が来るかも知れない。

俺みたいな大人になんかなりたくないと言っ日が来るだろう。

だから、その時は俺のようにはなるなと言ってやろう。

もがき、葛藤し大人になるものだから。

なりたくない大人も、

なりたい大人も、

悩んで決めればいい。

俺はそこまで成長したことに喜ぼう。

今のこの幸せな家庭は、耐えて頑張っている俺と、俺と子供の事を想って家事をしてくれているお前と、

俺達の想いで育った子供がいるからこそ成っているものだ。
何一つ欠けちゃ成らない俺達の幸せ。

帰ったら笑顔で出迎えてくれる妻子がいる。

暖かいご飯が用意されている。

おやすみと言ってくれる妻子がいる。

だから、俺は明日も頑張れる。

明日も耐えきれる。

ほら、行ってらっしゃいと言ってくれる。

大人（後書き）

かなり陳腐なものになってしまいました、が。

父は頑張っているんだぞっていう歌がよくありますけど、父も一人じゃ頑張れません。

人って何か目的があるから頑張れるんだと思います。

それが人の為じゃなくても、欲しい物や、払わないといけない物。

まあとにかく何かどうしても譲れない物があるならどんな理不尽も我慢して頑張れるんだと思います。

前話の続きでした。

病

——さらさら。と、

流れ落ちる砂のように。

——刻々。と、

時を刻む時計のように。

私は貴方の帰りをただ待っています。

桜が咲いて、ひらひらと散って行きました。

蝉が短い命を鳴き、喪って行きました。

緑が紅へと枯れて行きました。

一面白銀色と化しました。

また桜が咲く季節になりました。

四季は彩り進みながら、それを見る私はじっと立ち止まったままです。

何年も何年も、誰にも気づかれぬままここに立ち続けて貴方の帰りを待っています。

1年が経ちました。

2年が経ちました。

3年、4年と月日は過ぎて行きます。

ここを通る人が貴方の噂を口ずさんでいました。

けれど、私は貴方を待ちます。

だって貴方は帰って来ると言ったから。

ちゃんと薬を持って帰って来ると言ったから。

人伝いに貴方を街で見かけたと聞きました。

飛んで生きたい気持ちをそれが出来ない体が抑えつけます。

数日後、貴方が私の所に帰って来ました。

涙が溢れ、大好きな貴方の顔が霞みます。

手に持っているのは薬が入っている袋ですか？

何でそんなに泣いているんですか。

謝らないで下さい。

謝らないといけないのは私の方です。

お願いです。

顔をあげて下さい。

私は貴方に言わないといけない事があります。

こんな体になってごめんなさい。

耐えられなくてごめんなさい。

約束を守ってくれて

ありがとうございます。

帰って来てくれた。

それだけで、私の人生は幸せです。

その日道行く人が見たのは一つの木の前で泣く男の姿。手には使われなかった高価な薬が握りつぶされていた。

病（後書き）

人が木になる病気っていうファンタジー要素満天の短編です。

その世界では人が木になるという奇病があつて、それを治すには平民が到底手の届かない程の大金で薬を買うか、魔物が行き交う入ったら出られないと言う森のどこかに咲く花を持って帰って薬にしてみらうかのどちらか。

平民で金のない彼は森に行くことを決意し、必ず持って帰ってくると言つて彼女の元を発つ。

不幸中の幸いかこの奇病は、発病してから、木になるまで長く、最低でも三年はかかる。長いのは十年かかったという記録もある。

彼女は自分の事より彼が帰ってくるのを約束の場所で待ち続けた。

まあざつとこんな話です。

こういう感じの話が大好きな自分ですが……。
なかなか難しいです。

では、また。

意外と2連続更新です。

“ 永遠の愛 ” (前書き)

後書きにちょっとした続きを書いています。

“永遠の愛”

何も無い青年の心は荒み、何かを求めるように旅立つ。

街行く人は皆同じ顔で笑っている。気色の悪い、愛想笑い。

他人の事何かどうでもいい。それを隠すかのような笑顔の仮面。吐き捨てるように靴を鳴らし、青年は街を後にした。

青年は緩やかな坂を歩く。

さき程の街から少し離れた土と草がただ広がる無骨な道を少年は歩く。

あの空さえも、ただ青いだけ。何もかもが青年の心には届かなかった。

思えば、夢の為に彼女の傍を離れてから何もかもが色褪せて見える。

世界を見て絵を描くのが夢だったけれど、

こんなに世界が褪せているのは思わなかった。

人々は皆同じ顔をし、相手の顔を伺うことしか知らない。

雄大な筈の自然もどこか色褪せて、青年の心を潤しはしない。

彼女の元へ帰ろうか。

結局一枚も絵は描けはしなかったけれど、もういいだろう。

このまま絵を描けないまま帰る事を決めた青年は最後にこの小高い丘から見る景色を見納めにしようと決め、坂道を歩く。

不意に強い風が青年の髪を撫でた。

同時に何かが青年の鼻に触れる。
風に運ばれてひらひらと舞うそれは、一本の木から降っていた。

「桜」

数多く舞う桃色のその花びらが青年の視界を覆う。
空と大地と桜が綺麗に線となり境界線を作る。上から青桃緑に作られた三つの世界に青年の心は震えた。

「綺麗じゃろ」

啞然としている青年は囁れた声を聞き我にかえる。そして声の主、桜の木の下で座っている老人に視線を移す。

不思議な事に老人とその桜は文句の付けどころがない位に似合っていた。老人がその桜を愛し、桜もその老人を愛しているようにも青年の眼には映った。

「そういえば、もう春だったんですね」

この桜を見て、改めて今の季節を教えられる。随分前に忘れていた感情が湧き上がる。

「こんな綺麗な桜は初めて見ました」

「ありがとう。きっと喜んどるわい」

嬉しそうに桜の木に触れる老人。

この老人が幼い頃に植えた木なのか。それにしては、随分と小さい。高さが年頃の女性位しかない。

その木は立派に花を咲かせてはいるものの、他の桜より随分と小さ

かった。青年の彼女と同じくらいの大きさだ。

「今日は久しぶりの客人じゃの沙耶」

木にそう呼びかける老人。

その奇妙な光景に青年は違和感を覚える。そして、その違和感の答えを青年の幼い頃の記憶が導く。

青年の今は亡くなった祖父が言っていた言葉。

祖父が子供の頃に人が木になる奇病があったと。

青年は恐る恐る老人に問う。

「その木はもしかして……人だったんですか」

老人はその問いに苦々しくも笑って答えた。

「わしの恋人じゃった」

その言葉は青年の心を驚掴みにした。

「っ貴方は一体何年、」

青年の言葉が途中で途切れる。老人の優しく笑った顔に言葉が詰まる。

あの奇病はもう百年以上も前に予防法がわかり、その名を聞かなくなる程にこの世から消え失せた。

「待っていていたんじゃないよ」

その言葉が何を意味するか青年にはわからない。けれど、老人は桜の木に向かって話かける。

「信じてくれていた。それだけでもわしは嬉しかった」

老人はうつすらと涙を浮かべながら青年を見る。青年よりも小さい桜の木が枝を伸ばし、花を沢山咲かせて、その花びらが老人に舞い落ちる。

その光景を見て青年は気がついたら頭を下げていた。

「貴方達二人を描かせて下さい」

「おかえり」

「ただいま」

青年を暖かい家と久しぶりなのに変わらない彼女が出迎える。

「絵は描けたの？」

「ああ、この世で最も綺麗な一枚が描けた」

そう言い脇に挟んでいる絵を彼女に見せる。

「わあ、凄く綺麗。でもこの桜小さくない？ 隣りに居るおじさんより少し大きいくらいじゃない」

当然の疑問に青年はいいんだと一言だけ返した。

「あ、絵の名前は決めたの？ まだだったら私が決めてあげようか」
「名前はもう決まってるんだよ」

青年は絵の中の二人を見つめる。幸せそうに微笑んでいる老人と、花びらを惜しみなく咲かせている桜の木。

「 “ 永遠の愛 ” 」

百数年の時を経て、老人と桜の木は永遠として一枚の絵の中に残った。

“永遠の愛”（後書き）

『ありがとう。ずっと傍にいてくれて』

「沙耶、わしはもう随分とおじさんになったけどまだわしを愛してくれるか」

『桜になった私を愛してくれたのは貴方だけです。私が愛するのも貴方だけです。どんな姿になっても貴方は私の大好きな貴方です』

「……ありがとう、沙耶」

その日ある丘の上で、一人の老人が静かに息をひきとった。不思議な事に老人が背中を預けるようにして座っている桜の木も、全ての花が散っていて、春も半ばなのにもう桜が全て散っていた。その姿はまるで老人と共に亡くなったように見えた。

その姿はまるで老人と一緒に何処かに行ったようにも見えた。

前話の病の大分未来の話です。こういう話本当に好きです。だからかなり頑張って作ったんだけど……。やっぱり難しいです。人を愛し続けるのは難しいことだと思います。季節と同じで心は移ろい行くものです。けれど、その中に、一つの拠り所があったら、それが一人を愛する気持ちだったら。そんな人いたら尊敬します。

ではまた次回に後書きで。

追

暮れゆく空にどれだけ願っても……。

見下ろす聖母^{マリア}にどれだけ祈っても……。

救われない私はただ一人で泣くだけ。

もう二度とあの子を抱く事の出来ない腕を壊れるくらい掴み、

もう二度とあの子の笑顔を見る事の出来ない瞳を涙で潰す。

何度も呼ぶあの子の名前はただの音となり空に響く。

涙で潰された瞳じゃ、もう明日を見ることが出来ない。

あの子に触れる事が無くなったこの腕に価値はあるの？

暮れゆく空にどれだけ泣き叫んでも……。

優しい聖母にどれだけすがっても……。

神様なんてきつとないんだろう。

最後、私に出来る事は。

冷たい波が足を攫う。

体が黒い水に吞まれる。

体温が失われていき、

水が私を支配する。

あの子が受けた苦しみ。

せめて私も同じ思いをし、あの子の後を……。

水が私達を連れ去って行く。

深く、深く、深く、深く、深く、ずっと深くへ。

追（後書き）

恋人同士の不幸な話が多いんで、今回は母と子の話にしてみました。相変わらず暗くて、意味がよくわからないと思うんですけど、母が亡くなった子を追いかけるという話です。

だからタイトルは『追』にしました。

こんな暗い話ばかり何で今度はちょっと明るい話にしようかなあ、って考えてみたりはしてるんだけど、どうなるんだろうか。頑張ってみます。

最近こっちはつか更新してるんで、もう一つの方も更新しないといけないなあと思いつつ、出来ない自分がいるのが何だか嫌だなあ。

まあとにかく、ではまた次回後書きで！

砂時計

きつちりかつちり砂時計

さらさらさらさらと落ちて行くよ

全部落ちたぞひっくり返して再利用

きつちり三分砂時計

ちよろちよろちよろと落ちて行くよ

三分たったぞひっくり返して再利用

きつちり人生砂時計

大好きなあの子の砂が落ちて行くよ

全部落ちたぞひっくり返して再利用……

しくしく涙の砂時計

ぼろぼろぼろと落ちて行くよ

あれれ何だか終わりがやって来ない

ビンが全部埋まっちゃったよ

きっちり僕等は砂時計

みしみしみしと僕のビンにヒビが入る

とうとう割れちゃったよ

砂が全部零れたよ

僕はどうなるんだろう……

きっちり世界は砂時計

多量に落ちて行く砂は何だろう

あれ何だか僕にそっくりな砂が落ちている

あれあの子にそっくりな砂が落ちている

砂が多くてひっくり返せそうにないよ

一回きりだぞ砂時計

大好きなあの子の砂時計はもう終わり

僕の砂時計ももう終わり

あれ何だか真っ暗だぞ

あれ何だか真っ暗だな

あれ何だか真っ暗だよ

あれ

もしかして僕は……

きっちりかつちり砂時計

こくこくこくこくといろんな時を刻むよ

今もほら音が聞こえる

$$J \succ I \succ K$$

砂時計（後書き）

明るいのを目指しました。

どうですか？

明るいですか？

すみませんでした……。

何も言われなくてもわかります。

申し訳御座いませんでした。

砂時計が終わったぞ。ひっくり返して再利用しようよ！
っ的な明るい感じなのをやったんですが、段々と……。

ハッ、もしかして僕は根暗なのかっ！？

いいえあれはアホです。

ネタが古い……。

今回の話については補足？は特にありません。
想像力をフルに使って何とかこの意味わからない話に価値をつけて
やって下さい。

ではまた次回

今度こそ明るいのを！

幸せ

思い描いていた絵は散っていった。

壊したのは私の方。

何度も私の我が儘を聞いてくれていたのに、貴男のことを私は何も考えていなかった。

与えられてばかりの優しさが心地良くて、それに甘えすぎていたのは私の方。

今さら何を言っただって無理なことはわかっている。

でもどうしても私は貴男じゃないと駄目なの。

散らばった欠片を拾い集める。

涙で濡れた欠片に優しさが染み込んで離れない欠片を私は一人拾い集める。

もう一度、絵を思い描きたい。

もう一度、貴男と一緒にいたい。

優しい貴男だから、きっと戻って来てくれる。

そんな幻を今も見ている私がいる。

わかっている。

もう二度と描けるわけがないことくらい。

わかっている。

貴男はもう私を忘れていることくらい。

わかっている。

欠片を濡らす涙が手に落ちる。

夢見てた貴男との幸せさえも見なくなり、
昇る太陽が私を嘲笑う。

わかりたくない。

この手は確かに握っている。

わかりたくない。

貴男は必ずもう一度。

わかっている。

涙が手を濡らし、太陽が一人の私を照らす。

写真の私達は照らされることなく、

描いていた幸せは欠片すら見つからない。

でも空をきる手はまだ……。

幸せ（後書き）

明るいのはどこにいったんだよと。

明るいじゃないですか、昇る太陽とか……ごめんなさい。

諦めました。ぱつと浮かんだ時に明るいのは書きます。

久しぶりの更新何ですが、結構ありきたりの男女の別れを書いて見ました。

与えられてばかりで与えることも、与えられていることも忘れてしまっている人は結構いると思います。その内の一人が今こうやって後書きを…。

あ、あれですよ。お互い利益を重視して生きて行ったらいいんじゃないかなってことですよ！

凄く適当なこと言いましたが、ではまた次回後書きで。

読んでくださってる方ありがとうございます。感謝感激です。

距離

ねえ、どうして――。

こんなに好きなのに。

この距離がどうしても埋められない。

好きなのに。大好きなのに貴男に伝えられない。
答えを知るのが怖くて。

私に自信が無いだけ。貴男のせいじゃない。

貴男は自分からじゃ愛を語らない。

私は怖くて語れない。

愛を言葉にしない二人の距離は自然と広がって。

私は縮めたかっただけなのに。

距離を埋めたくて、愛を言葉にして伝えようとしただけなのに。

ねえ、どうして――。

伝えられないまま胸に残った愛の形。

一番遠くにいる貴男にどうしたら伝わるのかな。

空に向かって言えばいいの？

そんなこと何度もした。

泣きながら、何度も何度も空に貴男を想った。

もっと早く言えたなら、二人の未来は変わっていたのかな。

ねえ、どうして――。

大好きなのに、大好きな貴男は一番遠くへ。

私達の距離は一生埋まらないまま。

私達の愛はすれ違いのまま。

私だけが悲しみに生きて行く。

距離（後書き）

もつと早く口にしていれば未来は変わったのだろうか。

二人が共に歩く未来へと変わったのだろうか。

今じゃ後悔しか残っていないけど、貴男を愛した過去に偽りはありません。

貴男を愛している現在に偽りはありません。

私は今日も悲しい現実を生きています。

つてな感じで当て字まくりしましたけど、まあ後書きでの補足って見たる人が何人居るんだよっていう話ですよ。

極僅かの皆様本当にありがとう御座います。

後書きでベラベラベラ長々と本当にどうしようもない自分ですが、読んでくれる人がいるのならこれも無駄じゃないと感じられます。

とまあこんな唐突な感じの後書きが毎度のこと何ですが、懲りずに後書きも読んで下さったら嬉しい限りです。

感謝感激涙そうそう。

そんな言葉を思いつく寒い自分ですがどうぞこれからも宜しく願います。

ではまた！

罪と罰

教えて下さい。

皆が生きようと前を向いている時、

死のうと歩みを止めてる私は罪ですか。

もしこれを罪だと言うのならば誰か私を裁いてくれますか。

死のうとするのが罪ならば、この罪の罰は何ですか。

殺されることですか。

それとも生かされることですか。

もし殺されるならば一縷の光さえも見えない、耐えられることの出来ない激痛や苦痛の中で私を殺して下さい。

音を聞かぬよう耳を削ぎ、役にたたない鼻を潰し、針で刺し目から光を奪って下さい。

手足指関節が動かぬよう切り落として下さい。

そうしたら私は過酷な地獄の中で死ぬ。死が救いとなるそれは私には結局自殺と変わりません。

もし生きて行くのが罰ならば、私はどうすればいいですか。

明日からまたあの地獄を繰り返せばいいんですか。見た目ではわからない所に痣や火傷の跡を作られ、裸にされ意思の無い人形と同じよう弄ばれ、写真や動画に撮られ知らない所でも陵辱されて。

この地獄の中でまた私に生きろって言うんですか。こんな地獄の日々を死ぬよりはマシだと言うんですか。

私だって死ぬのは怖いんです。でも生きて行くことの方が怖くなりました。

もしこの行為が罪に問われないならば、私はこの汚れた体を地面へと破裂させましょう。今まで溜めていた憎しみを私の存在と一緒に消しましょう。

もしこれが罪でその罰が殺されることならば、見て見ぬふりをしたこの世界と私を人間ではなくしたあの人達を怨み、憎しみを魂に焼き付け呪いその罰を受けましょう。

もしこれが罰でその罰が生かされることならば、私はそれに素直に従いましょう。心を無くし人形のように犯され続け、なぶられ続け、私が生きているこの世界はこんな物だったのだと全てを諦めます。何も考えず、音も景色も心も捨て、ただ来る毎日をぜんまい人形のように繰り返しみましょう。いつかぜんまいが止まるまで。いつか私が死ねるその日まで。

この世界は私にとって地獄です。私は人として生まれ、人の形をした物としてただそこに有り続けています。

罪と罰（後書き）

——教えて下さい。この世界にとって私という存在は何だったのですか。

久し振りに更新！

いやあ、久し振りなのに重いですねえ。

何となくわかって来ました。明るい話は無理です。

出来れば、無理ですの語尾に星マークをつけたかったんですけど痛いから止めますねー。

毎度毎度何でこっちの方はこんなテンションなのか理解不能ですが、まあそれはゴミ箱にポイしておいて下さい。自分はさつきしました。

ではではいつもの補足を。

今回読んでわかる通りいじめと自殺をテーマにしました。やっぱり最初から死にたくて生まれて来る人は絶対にいません。

自殺はやっぱ心が弱いとかじゃないと思います。人がどれだけ傷ついて、どれだけ悲しいかなんて所詮他人には理解出来ない事です。家族でも出来ません。けれど、そんな事わからなくても手を差し伸べることは出来ます。悩みを聞く耳も、言葉を感じる体も、優しい声をかけてあげられる口も、伝える術もあるのに、何故それが出来ないんでしょうか。いじめに立ち向かえとは言いません。真っ向からそんなこと出来る人なんてあまりいません。逃げるだけでいいんです。手をとって一緒に逃げてやるだけでどれだけその人が救われ

るか。

まあ、所詮他人としか思えないからそんな事が出来ないんだと思います。それにやっぱり勇気もいりますもんね。

けど自分の勇気で救われる人がいるんです。だったら……。

めっちゃくちゃ長くなりましたあ。

ではまた次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1163o/>

想の本～ソウノホン～

2011年12月13日01時48分発行